

一声社：TEL03-3812-0281/FAX03-3812-0537

一声社新刊 NEWS

『紙とえんぴつでおはなし』 ..いよいよ 10 月 10 日頃、取次新刊搬入予定！ 乞うご期待！

恐怖の地下鉄刃物男—その②

ある日の地下鉄車内。ヨネやんの目の前で大きな紙袋から立派な包丁を取り出した兄ちゃん。ヨネやんは恐怖のあまり声も出せず、腰が抜けて逃げ出すことも出来ず固まっておりました。

「何とか逃げんと・・・」。兄ちゃんを刺激せんように、少しずつ少しずつ・・・。ヨネやんはまるで新しいダンスのステップのように、立ったまま靴を小刻みに動かし、何とか兄ちゃんから距離を稼ごうと必死です。背中には気持ち悪い汗が流れ、顔面蒼白。視線は兄ちゃんから動かさず、次の行動を注視しています。

「何でみんな気づかへんねん」

そんな感情がますます体を縛り付けます。その時！ 兄ちゃんが動きました！

「何をやる気や～～！」

抜き身の包丁を舐めるように見つめていた兄ちゃんは、視線を下に落とします。

「そこに、何があるんやろ？」。

兄ちゃんは右手に包丁を握ったまま、少しかがんで大きな紙袋の中に左手を入れます。

「やめて～～！ 今度は何？ もう 1 本包丁を出すん？ 別の新しい武器？」

ヨネやんの恐怖と緊張がマックスに近づいた時、兄ちゃんが紙袋の中から物を取り出しました。細長い箱です。「あれは？」。恐怖で脳が働かないヨネやんは、その箱が何かすぐにはわかりません。

兄ちゃんは、左手に細長い箱、右手に包丁を持って、背筋を伸ばして立っています。やがて、細長い箱に、右手の包丁を納めます。「あっ！

包丁の箱やったんや」。

また少しかがんだ兄ちゃんは、今度は右手を紙袋に入れました。取り出したものは、蓋です。包丁を納めた箱に蓋をして紙袋の中に入れます。そして、紙袋の取っ手を右手で握って立ち、なんと！ 口元は何やら笑みがこぼれているのです。

「怖い・・・、その笑顔、ほんまに怖い・・・」

気絶寸前のヨネやん。もう限界か・・・とうっすらと思ったその時です。

「まもなく、北千住～北千住です」の車内アナウンスが遠くに聞こえ、やがてプシュ～という音と共にドアが開き、兄ちゃんは、紙袋を持って降りていきました。

「なんやったん？」

事態は呑み込めないものの、「助かった！」とわかった途端、汗がどっと吹き出し、心臓が安心して突然鼓動を早め、どお～と疲れが押し寄せました。

「で・・・、なんやったん？ 結局」

次の駅で降りてベンチに腰掛け、心と体を落ち着かせた後、よくよく考えてみると・・・こういう事だったのではないかと。

あの丸刈りの修行僧のようなお兄さんは、板前修業中だったに違いない。板前の世界も修行や上下関係等非常に厳しい。中学・高校を卒業して、下働きを何年何年も務め、ようやく自分だけの包丁を持つ事を許されて、合羽橋かどこかに初めてのマイ包丁を買いに行ったと。初めての包丁が嬉しくて仕方がなく、帰る途中の電車の中でまた取り出してじっくり眺めてみた。心行くまで眺めて思わず笑みがこぼれ、そして電車を降りて行った、と。そんなところでしょう。でも、言いたい。

「電車の中で抜き身の包丁を出すのは、止めてね！」